
除霊師の少女

笹木半助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

除霊師の少女

【Nコード】

N3652B

【作者名】

笹木半助

【あらすじ】

ゼーレンラント・ストーリー第一部。「この世」と「あの世」、幽霊の存在までもが認められた世界の、ある島国に生きる物達の物語。森の中で道に迷うルートは、賞金稼ぎのフリッツに出会う。「要は俺を雇って事さ。大サービスで前金は無しだ」護衛を名乗り出る彼と共に行動する中、ルートは様々な事件に遭遇する。

第1章：die Einleitung 旅の契約

食堂の窓から外を見ると、陽光に美しく照らされた街路や建物が目に飛び込んできた。

耳を澄ますと、小鳥の囀りさえずも聞こえてくる。

そこには、爽やかな一日の始まりを感じさせる光景が広がっていた。

ここは東の領土、ノイエンドルフ。

“豊土”と称されるこの地の、とある都市の中央に位置する邸宅では、そろそろ朝食の準備が整ったようだ。

侍女が呼びに行っただろうか、この邸宅の主人らしき人物と、その家族が続々と食堂に入ってきた。

長い四角のテーブルの奥には熟年の男が、そしてその隣に妻らしき女と年長の娘が向かい合わせに座る。

続いてその下の子供2人が彼女らの隣の席につくと、閉じかけた扉の向こうからこちらへ駆けて向かってくる音が聞こえた。

「カスパー様！」

足音の主は主人の名を呼び、彼らが朝食をとろうとしていたにも拘わらず、血相を変えて食堂に飛び込んできた。

カスパーと呼ばれた男は、うんざりした顔をして「何事だ」と訊ねる。

朝食の席に集った光景を見た時点で、彼には思い当たる節があったのだ。

返事が聞こえるまでには少し時間があつた。従者は呼吸を整え、ひとまず落ち着き、しかし声はまだ動揺を残したまま、男に訴えた。

「申し訳ありません！ お嬢様がまた！」
「……やはりそうか」

肩をすくめ、側にいる妻に目をやった。彼女もまた、案の定と言わんばかりの表情だ。

カスパルには妻と4人の子供がいた。

テーブルに向かう長女・長男・次女の3人は既に成人し、職に就いている。残る末娘はそれより少し歳が離れており、まだ15歳であった。

世話をしてもらうには事欠かず、両親・兄弟ともによく彼女の面倒を見ているのだが

「これで何回目？ よくやるわねえ」

過度に与えられるばかりの環境は、15歳の少女にとっては窮屈だったのだろうか。

次女モニカがすっかり慣れてしまった様子で言うのを聞いて、カスパルは同意した。

外に出なければ一緒に行つてやると、彼女には再三再四に渡つて言つてあるのに。

よほど一人で行動したい何かがあるのだろうか。

「今回は一体どうやって抜け出したんだ」

カスパルはその手で白髪混じりの黒髪をかき、従者に訊いた。

「はい、近くの従者を魔術で眠らせた様です」

「昏睡枕術コスマコロ？ あの娘、使えました？」

眠らせた、という言葉に妻ブリュンヒルトは魔術の名を口にした。

魔術師の家系でもあるこの家において、家族が何らかの魔術が行使できるのは何もおかしな事はない。むしろ教育の一環として、両親と長姉テレーズが子供達それぞれの力量に応じて教えているほどだ。しかし、妻の質問にカスパルもテレーズも、首を横に振った。誰も教えた覚えがない魔術だったのだ。

訝しがる両親の気も知らず、長兄のカールが思い出した様に口を開いた。

「ははあ……判ったぞ。俺に使い方を訊いてきたのはこういう事か！」

彼は謎が解けたとばかりに手を打つ。

しかし表情が明るいのとはただ一人で、他の家族は皆開いた口が塞がらない様子だった。

「兄さん！ あの娘に教えてどうすんのよ！」

「本当だわ。こんな結果になるのは目に見えて判っててよ」

まず妹のモニカから、続いて姉のテレーズから矢継ぎ早に非難をされてしまう。

両親はもう呆れて物も言えない様だった。

魔術は、一般には自分で学習するか、他者からノウハウを教わる事で身につけていく。

だが、中には他人に害を及ぼす術もあるため、良心や法などで制限がかけられ、生活に役立つ程度の術しか知れ渡っていない。

もつとも、多くの人は誰でも楽に覚えられる“生活魔術”にしか興味を持たないからという理由もある。

そういう現状だというのだから、家族の全員が、家族だけでなく周囲の従者も呆れ顔で、カールに非難の視線を向けた。

彼が「喋らなければいいものを、うっかり口走ってしまった」と気付いた時にはもう遅かった。

冷たい視線を投げるだけでは我慢のならないテレーズとモニカから、容赦ない責め言葉を浴びせられた。

「ど、どうしても言うからさ。一応、悪用するなって釘刺したんだけど……」

「あの子がそんな事を聞くと思って？ カール、罰として一ヶ月教会の床磨きをおやりなさい」

「まままじですか姉さん！ 俺昨日でやっと床磨きの罰終わったんだけど！」

「床磨きだけで済むと思ってるの？ これであの子に何かあったらどうすんのよ！」

従者を眠らせただけでは、彼女らもここまで怒りはしないだろう。

問題はその先 決して安全とは言えない街の外を、1人で出歩いている末っ子の身に何かあったら である。

過去に似た様な事があり、無事に帰ってきた事があったとしても、未来はどうなるかわからないのだ。

「はあ……魔術なんか教えるんじゃないよ」

カールはテーブルの上の朝食をフォークで突きながら、しゅんと頂垂れてしまった。

元気の良さや明るさは彼の長所でもあるのだが、それが行きすぎてしまう事が多々あった。

ひとまず彼の軽はずみな行動に対する「裁判」の終わったところで、

問題の末娘について話題が移る。
両親はいつもの事だ、と慣れた様に従者達に言った。

「数日も経てば手紙をよこすか、満足して帰ってくるだろう」

「そうね。私も大丈夫とは思うけど……念のため何人か探しに行かせて頂戴」

「はい、畏まりました！」

従者は頭を下げ退室した。

カスパルは落ち着いた様子で指示を下すと、朝食を食べ始めた。

彼は密かに楽しみにしている事があった。

そして、度々この様な事が起こるにもかかわらず、徹底的な対策をしていないのにも理由があった。

ブリュンヒルトには内緒にしているが、彼は娘の土産話を何よりも楽しみにしていた。

服を汚してしまっても、家で皆と過ごすよりも何倍も楽しそうな表情で帰ってくる。

自分の足で見てきた事、感じたことを、目を輝かせて話してくれる。その様子が、彼は可愛くて仕方がないのだ。

「……だが、帰ったらまずは叱らねばならんな。幾ら何でも度が過ぎておる」

「何言ってるんですか。あなたが叱った事なんか一度もないでしょうに」

表情を弛めたまま出された言葉に説得力はなく、また妻の指摘に反論もできなかった。

東の領地ノイエンドルフの大半は大規模な森林地帯で、そこには天然の住処と食料に誘われて多くの小動物が住んでいる。

また肥沃な土地に恵まれている証拠として、ここ数十年農夫達が凶作に頭を抱えた事がないらしい。

大半が砂漠である中央の領地に住む者達からすれば何とも羨ましい話である。

だが、潜む場所が多い深い森は無法者達の格好の住処ともなり得る。行き交う者の金品を奪取する事が「仕事」の野盗にとって、奇襲のかけやすいこの森は非常に住み易い。

そのため領の中心部から離れるほど 酷い時などは、隣町へ行く時にすら護衛をつけねばならぬ程だと言われている 「彼ら」の数は多くなっていた。

「これで3万バレンか。楽なもんだ」

当然ながら各都市の領主は対策として野盗の首に賞金をかけ、多くの“屠る者”^{ほぶ}達を募る。

並の盗賊程度であれば、正式な依頼で討伐隊を派遣するよりもそちらの方が都合がいい。

特に今の時代にはうってつけの方法なのだ。

「早いうちに役所にも行ってくるかな」

この男も賞金稼ぎの一人なのだろうか。彼はひとりごちて、地面に投げ捨てていた麻布の袋を拾い上げた。

大柄で体格の良い彼の手には、金属製の爪の様なものが握られている。

持っていた布でそれについた血糊を拭き取ると、彼は何かに気がついたのか、近くにある茂みの向こうに目をやった。

先程、最早名前すら忘れてしまった盗賊団の頭を狩ってから、まだそれほど時が経っていない。

残党か、それとも別の集団か

男は眉をひそめ、微かに感じる気配に視線を向け、聞こえる音に耳を峙てる。

ガサガサと草をかき分ける音に続いて、地面に落ちた小枝をぱきりと踏む音。

どうやら、野生の動物ではなさそうだ。

しかし、恐らく人間ではあるが、あまりにも騒がしい歩き方は、野盗のそれですらない。

男は気配を殺して茂みへ近付き、鳶色の目でその奥を観察する。

捕らえた光景は、全く予想だにしないものだった。

「あれえ？　こんなに遠かったっけかなあ」

声の主は誰に尋ねるわけでもなく、そんな言葉を呟いて獣道を歩い

ていた。

高価そうな生地の、黒いブラウスの上に着ている上着は、青を基調とした布に薄紫色の模様が描かれている。

7分丈のパンツの裾にルーン文字の刺繍がされているのは、護符ではなく装飾の類だろうか。

深い森を散策するにはあまりにも頼りなく、場違いであると言っ
ていいものだった。

まるで“ちよつと隣町まで出かける”程度の軽装備である。

その者は立ち止まり、腕を組んで悩んだ様子を見せた。

道にでも迷っているのだろう。そうでなければ、歩き辛い獣道など
選ぶ筈がない。

「こつちの方が近そうだよねー」

明るい茶色のミディアム・ヘアは根拠もなく、獣道からも外れて進
もうとした。

不安そうな顔をしていたが、それほど深刻でもないらしい。鼻歌を
歌って歩く程のものだ。

茂みをかき分けた先に、新たな道があると思っ
ているのか、何の迷いもなくそこへ進む。

そして、二人は出会った。

「子供か？　こんな所で何してるんだ」

茂みが動いて中から壁の様なものが現れた。

茶髪の方は一度びくつと全身を強張らせ、目の前に突如立ちはだかつたそれが何なのか確かめた。

足下から目線を上にあげ、頭の前には、鋼の胸当てが一つ。

そして、一度間を置き、更にも上の方を見ていくと　青みがかつた銀髪の強面が視界に入ってきた。

すぐさま、回れ右。

「つきやー！！」

「お、おい！　待てっておい！」

子供は恐怖の余り何も考えず、道なき道をただ一直線に駆け出した。森の中、突然背後から見知らぬ者に　ましてや相手は自分よりも悠に頭1つ半は背の高い男である　声をかけられたのである。身の危険を感じて、逃げ出してしまうのも無理はないだろう。ひよっとしたら野盗だと思ったのかも知れない。

「……あ、はあ、もう大丈夫かな」

子供は闇雲に森を走り抜け、そう長くないうちに息を切らす。

後ろを振り向き、あの男が追いかけてきていないのを確かめると、徐々に走る速さを緩めていった。

声をかけられた男とは面識がない。それ故に、子供にとっては恐怖でしかなかった。

上体を前倒しに、両手を膝に置いて体を支える。

中腰の姿勢で上がった息を何とか整えていると、ふと目に映る地面が遠くなっっていく気がした。

「あれ……浮いてる？」
「ふう。やっと追いついたぜ」

突然耳元で声がした。

その子供は一目見て華奢に思える身体に似合わず、思いがけない速さで逃走していた。

それでも大人の歩幅の差と、鍛えられた男の体力には敵わなかったようだ。

持久力がなく、疲れて速度の落ちたところを捕まえられた様で、男に軽々と抱え上げられていた。

それに気付いた子供は、一呼吸おいて、また甲高い声で叫び出す。

「つきやー！」

「ああ五月蠅い！」

「下ろして降ろしておーろーしーてー！」

「わかった！ わかったから叫ぶな！」

森の中にいるどの動物よりも大きい声が、辺りに響いた。

学者曰く、赤子の泣き声というものは荷馬車の通り過ぎる音よりも遥かに大きいのだ、と。

そして、人間の聴覚を最も阻害する音波は人間の声だ、と。

赤子でなくとも、子供の高い声色で叫ばれると、とても耳には良くない。

男は要望を直ちに聞き入れ、バタバタと手足を振る子供を、近くにあった切り株に“置いて”座らせた。

「突然逃げるなよ。何も子供相手に取って食う様な真似はしないさ」
「だってお兄さん、ドロボウなんでしょ？」

疑いの眼差しを向ける子供に、男は苦笑した。

彼の持つ白銀の短髪はまるで刃のようで、灼けた褐色の肌との対比から際だって見える。

背丈は男の中でもかなり大柄な方だろう。そして腕や足は、まさに丸太の様に太かった。

彼は“追う側”の人間ではあったが、その風貌は見るからに厳つく、威圧感の漂うものだった。

更に服装はあからさまに戦い向きのもので、大きな胸当てと後ろ腰に挿した皮の鞘などが物々しい。

小さな子供からすれば、彼の方が野盗に見えるのも仕方が無いだろう。

男は勘違いされる事には慣れていたが、さてどうするかと考えていた。

言葉で否定したところで、証拠が無ければこの子供は信じないだろう。

現に、彼が言葉を選んでいるところ、それを待たずに勝手な想像を膨らましていた。

「僕がちよつと可愛く見えるからって、どこかに売ったりするんでしょー！」

男はため息を漏らし、短く刈られた髪をぐしゃぐしゃと搔く。

心の中で「クソガキが」と呟き、少し脅すような言葉を吐いた。

「……そうして欲しいならやってやるぜ」

「ごめんなさい今の冗談だから！」

目の奥の僅かばかりの殺気にでも気付いたのか、子供はやけに早く男に謝った。

まるで、始めから返事を予想していて、からかうつもりで喋りでもしたのかと思う程だ。

子供は落ち着かず、そわそわした様子でいた。

さつきよりは遠慮がちに、それでも疑いの心は晴れず、しかし男に些か恐怖心を抱く。

そんな心の内を態度に露わにして、上目遣いに男の顔を見て訊ねた。

「じゃあ一体何者なの？」

「それはこつちが訊きたいくらいだ。何だってお前さんみたいなのが、こんな所を彷徨つらついているんだ」

「質問をされたらまず答えるのが礼儀だって父様が言ってたよ」

「……よくできたお子さんで」

男は肩をすくめ、言葉とは裏腹に、表情には一つも感心した様子を見せなかった。

例えそれが礼儀だとしても、歳の離れた初対面の人間にわざわざ言う事ではない。

それこそ、そんな事をさらりと口にしてしまうのは、よほどの世間知らずか、融通の利かない正義漢か、あるいは状況を読まない向こう見ずな人間ぐらいのものだろう。

彼は、いつまでもこんな所で油を売っているつもりはなかった。

怪しくない程度に素性を明かしておけば、この子供も納得するだろうと思ひ、適当にあしらって立ち去る事にした。

「俺はこの辺で賞金稼ぎをしている。名前は別にいいだろ？」

「父様は人と会って話をする時はまず自分の」

「わ・か・っ・た。名前を言えっつてんだろ？」

観念した様子で男はフリッツと名乗った。

子供は満足そうに肯き、その仕草は確かに可愛らしいのだが、今のフリッツには憎らしく見えた。

「僕も一人旅してるんだよ。ルートって言うの」

「一人で？ 嘘つくなよ」

彼の言う通り、野盗がよく現れるこの領土では、特に深い森の獣道を子供が一人旅をするとは考えられない。

捨て子や身売りにしても街中までは親か主人と一緒にだ。森で見かけるのはまず無いと言ってもいい。

そういつた理由で、彼は自信を持って「嘘」だと言ったのだがルートにはあてはまらないらしい。

「ホントだよお。ちょっと隣町まで遠出しちゃったから、今は帰る途中なんだけど」

「隣町から？ だったらエツフェンベルクか」

「え、違うよ？ ゴットホルトからそこに行ったの」

フリッツは頭の中で地図を描いた。

今、彼らの立つ場所は領内の都市で最も東に位置する“自治都市グタウン”の周辺だ。

ルートの目的地であるエツフェンベルクは、ここより西へ向かうと見つかる都市である。

そして出発地のゴットホルトは、更に南西へと進み、領土の中央に進まなければ到達できない。

仮にルートの言葉が本当だとするならば、この地で出会うのは奇妙な事だ。

何故なら、目的地と出発地を結んだ線上には、グラウンの存在などないのだから。

「 ちょっと待て。ゴットホルトに帰るなら全く逆の方向だぞ」「 えっ？ うわ、またやっちゃったよ！」

今までその事実には全く気付かなかった様だ。

ルートはフリッツの言葉を聞き、そこではじめて頭を抱えて、しまったという表情をした。

迷う事なく逆の方へと進んでいたのだから、出会っていないければこの子供は大変な事になっていただろう。

一人で森を彷徨い歩き、やがて周囲が闇に包まれ、獣と野盗の殺伐とした世界に足を踏み込む

きつと、明日の朝陽は見る事が出来ない。

ルートは果たしてその事を想像できるのだろうか、とフリッツは他人事ながら心配した。

「まさか方向音痴か？ 全く、それで一人旅とは恐れ入るぜ」

「ちがうよ！ ほんのちょっと方向感覚が弱いだけ！」

「五十歩百歩、つてえ言葉を知らんのか。お前さんは」

見るからに男と十歳は歳の離れたこの子供には、身の回りに潜む危険というものがどれほど理解できているのだろう。

両腕で大きくxマークを作るルートに失笑するフリッツは、とある事を考えついた。

ルートの姿を見て、そしてこの子供がゴットホルト 位の高い僧侶や富豪の住む都市 から来た事から閃いた事だ。

これは自分の利になる事でもあり、相手の助けにもなる、と。

言うまでもなく、男の狙いは前者の方だった。

「おい、家まで連れて行ってやるのか。道分らないだろ？」

「エツフェンベルクまでは地図持つてるけど……うーん、どうしよう」

「また俺みたいな男に掴まってもいいのか？ 今度は本物の人さらいに」

ここからゴットホルトに帰るには、2つの都市を通るのが現実的な方法だ。

そして1つめの街、グラウンに着くまでの道中というのは、実は最も危険な道だった。

ルートはそんな事も知らないで、暢気に鼻歌混じりに歩いていたのだ。

フリッツからこの事実を教えてもらうと、声に些かの恐怖が混じった様に思えた。

これで、事は彼の思惑通りに進むだろう。

「ほ、本当に連れて行ってくれるの？」

「約束しよう。ま、条件はあるんだが」

首を傾げ見つめるルートに、フリッツは不敵に微笑んだ。

彼は親指を人差し指と中指に擦りつけるジェスチュアをしながら、条件が何であるかを答える。

訊く者がそれなりに歳をとっていればその動作のみで察しがつくのだが、どうやら相手は理解していないようだった。

「報酬だよ、要は俺を雇って事さ。大サービスで前金は無しだ」
「そっか、なるほどね。でも僕は人雇った事ないし、そんなにお金持っていないよ?」

「金額は親父さんと交渉するさ。お前さんはここで了承するだけでいい」

悪い様にはしない、というフリッツの最後の言葉に押される様にしてルートは承諾した。

「うん。わかったよ。着いたら父様に言ってみるね」

「ああ……良い子だ」

フリッツはそう言ってにやりとした。

見るからに質の良い服を着たルートは、間違いなく富豪の家の子供だ。

そうなれば報酬も期待できるし、事の次第によれば多少値をつり上げもできるだろう。

「それにしても前金無しで俺を雇うんざ、全く前代未聞だぜ」

命に関わる依頼も少なくはないし、最悪、依頼人が金を踏み倒す場合もある。

そんな事から、大抵の傭兵や用心棒は前金を要求し、その額を自らの実力を誇示する手段にした。

また、依頼する側も「金を払うだけの仕事をしろ」という意味も含め、先に依頼料の半額を払う事が多い。

この“業界”で暗黙の了解となっている制度を、当然ながら子供のルートが知っている筈もない。

フリッツは先に待つ大きな報酬のみを頼りに、この依頼を引き受け

ただ。

馬鹿な事をしたものだ、彼は自嘲の笑みを浮かべた。

「じゃあ行こっか」

ルートは切り株から腰を上げた。

近くの地面に置かれていた麻袋を、持ち主の男に渡そうと持ち上げる。

しかし、思いのほかずっしりとした中身は、非力なルートでは少し辛かった。

「重いなあ……何が入ってるの？」

「おい、待て！ それは」

興味本位でルートは麻袋をのぞき見る。

それがまずいのか、慌ててフリッツが止めに入ったが、既にルートの目には中の“何か”が映っていた。

それは、片腕で一抱えほどの塊で、長く生えている毛は明らかに人間の頭髪だった。

不潔な感じのするその隙間からは、少し汚れた青白い皮膚が覗く。緩んだ袋の口から様子を見たくらいでも、それだけの事がわかった。

少し遅れて錆びた鉄の臭いがルートの鼻に届く。

だがその時には既に、何から発せられるものなのか察知できない状態になっていた。

袋を覗いた後、目を見開き硬直していた子供の体は、力を失う。

文字通り“腰を抜かし”て、地面に倒れ込んだ。

「これだから金持ちの子供は……」

失神したルートを前に、フリッツは苦い顔をして頭を掻いた。

自治都市グラウン。

大陸の東に位置する領内の中で、最も東端に位置するこの都市は特に外界と隔離されやすい。

また近年にわたって増えている野盗を恐れるのもあって、尋ねる旅客も少なくなっていた。

昔は避暑目的で暑い時期に訪れる者も多く、それなりに賑わっていたのだが、今は閑散とした様子しか窺えなかった。

しかし過ごしやすさには変わりなく、気持ちの良い暖かな風は今日も街路を通り抜けてゆく。

程良い陽気も相まって、居るだけで気分が和む様な街だ。

森の中で気を失い、フリッツに背負われている子供も、そんな空気を肌で感じ取っているのか、表情を穏やかにしていた。

「さて……どうしたもんか」

可愛らしい様子のルートと対称的に、威圧感すら漂わせる風貌の男はため息をついた。

それは遠巻きに彼を不審そうに見る街の住民に対してではなく、耳元で気持ちよさそうに寝息を立てる依頼人に気付いての事だ。

気絶したのだから仕方ないが、知り合ったばかりの相手に身体を預けて眠るなど、あまりにも無防備で、よく今まで無事に旅が出来たものだと感心させられてしまう。

同時に、あまりの暢気さに呆れてもいた。

フリッツは些か大袈裟に、身体を縦に揺らした。

少しずつ下へとずれてきたルートを背負い直すためと、そろそろ起こそうと思ったからだ。

「ん……」

ルートは重そうに瞼を半分開く。

まるで自分の背が急激に伸びたかのような視界に違和感を覚えた。

そして、すぐ側にフリッツの顔があり、彼が横目に自分を見ているのが確認できると、驚いて目を見開いた。

「よお」

「っ！ ちょ、ちょっと、降ろしてっ！」

落ち着いた男と相反して、ルートはじたばたと彼の背の上で暴れだす。

本当に嫌がっている様子ではあるが、それがどうという理由からくるのかは彼には判らなかった。

とりあえず望む通りにしようと、腕で固定していたルートの足を自由にしてやった。

ルートは地面に足をつけると間髪入れず、たたらを踏みながら後ろ

へ下がる。

そして無闇に暴れた勢いを制しきれず、バランスを崩してしりもちをついてしまった。

「いったあ。もうっ！ 何するつもりだったの？」

「だからそんなに怯えるな。悪い様にはしないって言っただろっ？」

未だ信用されていないという事か、とフリッツは理解した。

やはり自分の風貌と言葉遣いが、育ちのいいルートに必要な以上の警戒をさせているのだろう。

これでも気遣ってやっているのに

そう思うと何だか腹が立ちそうで、気を紛らわすために、彼は少しルートをからかってやる事にした。

「それに、随分居心地良さそうだったぜ？」

「だ、だって父様だと思ってたんだもん……」

「……さいですか」

気を許さない態度のルートの心を揺らしてやろうと投げた台詞はさほど効果がなかった。

それどころか、返ってきた言葉の方がフリッツにダメージを与えた。歳が離れているとはいえ、見たところルートは13、4といったところ。

彼の年齢は28。もし子供を持っていたとしても、まだルートほどの歳にはならない程度なのだ。

「でも断りなしに女の子の体に触れるなんて！」

「悪いが、そういのは流石に俺とお前さんじゃ不釣り合いだと思うぞ。それこそ歳からして」

今度はルートの方から、恥ずかしさを紛らわす様にして男にもの申す。
全くその気のないフリッツは呆れて言葉を返すが、そこに何か違和感を感じて口を止めた。

ルートの言葉の中に、引つかかるものがあった。

フリッツは改めて、頭1つ分以上も背の低い依頼人をまじまじと見つめる。

中性的な顔立ち、服装も同じく、今まででルートのジェンダーをイメージさせるものはただ1つ。

“僕”という人称だけだった。

思わず彼は目を開き、ルートに失礼な質問を投げかけた。

「お前さん、女だったのか？」

「うん。よく男の子に間違われるけどね……あ、フリッツもそう思ってたんだ」

ルートはしりもちをついたのを気にしてか、パンツを叩いて埃を払う。

2、3度その場で屈伸をして、寝ぼけていた身体を目覚めさせると勝手に街の中心へ通じる道を歩き出した。

フリッツは自分が予定していた行き先と同じだったため、彼女に歩調を合わせながら隣に並んだ。

「でも仕方ないよね。今はワザとそう見える様にしてるから」

「何でまた男の振りなんかしてるんだ？」

フリッツの問いに、ルートは誰かの真似をして答える。

彼が全く知らない人物だったが、その正体は彼女の会話から聞き取

れ、なるほどと納得する間柄だった。

「女の子の一人歩きは危ないからよしなさい！ …… って言うからね、母様が」

「はは。お前さんほどの歳だと、どっちにしる危ないだろうが」

実に単純な発想だと、フリッツは失笑する。

そして、母親の言葉を真正面から捉えるあたりからすると、根が真面目なのだと理解する。

こんな性格のルートは、今のグラウン周囲に多く潜む盗賊らには、この上なく都合のいい“獲物”になる。

多少は生意気だが、決して人の悪くない子供がそんな奴らの餌になるのは忍びない。

報酬も完全に保証されない中で、自ら護衛を名乗り出て、目の届く範囲に彼女を置いて良かったとフリッツは改めて思っていた。

そんな彼の心中など知る筈もなく、ルートは暢気に自分の“変装”に自信ありげな様子を見せた。

「そうかな？ 結構効き目あるよ。変なおじさんが寄ってこないし」
ルートはそう言って陽気な笑顔を見せた。

全体的に整った顔に大きな目、そして愛らしい表情を持つとなれば、様々な人間を寄せるだろう。

親切にしてくれる大人や、逆に、邪な目的を持つ少女趣味の輩など。彼女自身、既にそういう経験があるのか、後者を避ける目的で女である事を隠していた。

フリッツは彼女の言葉に納得はしなかったが、そうかと言うだけにとどめた。

これ以上危険を示唆　例えば、人買いならば男女は気にしないだろうし、少なからず存在する“少年を好む男”という者にとっては変装したルートは格好の的だ　したとしても、ルートの不安を募らせるだけで、何も利になる事などないのだから。

全くもって何も考えない、無防備なお嬢さんではないのだ。それだけでも良しとしようと、フリッツは心の内で決めた。

時は昼下がり。

二人は商店のある区画へ移動していた。少し遅めの昼食をとるつもりだった。

すっかり落ち着いたルートは、フリッツから行き先を告げられた事で、自分がひどく腹が減っている事に気づく。

彼女は、早朝から森の中で迷っており、長い間食事をとっていないかったのだ。

二つ返事でそれに同意すると、鼻歌交じりに足を運んだ。

しかし、そんな気分はすぐに台無しにされてしまった。

大きな商店の角を曲がった所に出くわした、一人の粗野な男によって。

その者は下卑た笑みを浮かべて二人を睨む。

こちらを見て「やつと見つけたぞ」と呟く声が聞こえた。

偶然の出会いではない、少なくとも男の方には目的がある様に感じた。

猫背で不潔な男の風貌は、フリッツとはまた違う意味でこの街にそぐわない。

あからさまに気質の者ではない事を表していた。

フリッツはきよとんとした表情でルートを見て、声をかける。

「寄ってきたぞ。変なおじさんが」

「え……あれ？ ホントだ」

彼の言葉にその男は激高した。

「違う！ 用があるのはお前の方だ！」

「マジか？ 気持ちだけで十分だぜ。悪いが俺はそんな趣味は」

「うああそっじゃねえ！ こっちの方が気持ち悪いわ！」

男は頭をぐしゃぐしゃと掻きむしって叫んだ。

勝手な想像で、男はフリッツが短気で好戦的な性格だと思いこんでいた。

きつと何かありげに睨んでみせたら、こちらの“喧嘩”を買って出るだろう、と。

だが事實は期待とは裏腹に、睨みは軽くあしらわれ、熱くなっているのは男ただ一人のみ。

フリッツは最初から、殺気を露わにした男の目的が何なのか気付いていたのだ。

それに乗るまいとして、敢えてとぼけた振りをしてみせたのだが

「やっと来やがったな、白虎さんよお……俺達の縄張りを荒らした落とし前はつけてもらうぜえ！」

男の方は事を荒げたくて仕方がない様子で、少なくとも彼にとっては正当な理由があった。

言葉の中にある通り、賞金稼ぎのフリッツに自分の所属するグループを狙われたのだろう。

逆恨みも甚だしかつたが、そんな理屈を言ったところで通じる様な人間ではない。

「白虎つて？」

「俺の事だろう？ くだらねえ名前をつけてくれたモンだ……ちょいと“ここ”が足りんらしいな」

見上げて尋ねるルートの方を向いてフリッツは答えた。

この豊土の中で野盗狩りを続けていた彼は、目立つ髪の色とその実力で、“その業界”の仲間内で噂が立つほどになった。

そして本人の知らないうちに、ノイエンドルフの白虎という大袈裟な通里名を勝手につけられてしまったのだ、と。

役人から感謝されて称されるならともかく、盗賊達に怖れて囁かれる名など、悪名以外の何でもない。

フリッツは呆れた風に、人差し指を曲げて自分のこめかみをコツコツと叩きながら言った。

あからさまに挑発した言葉に、案の定野盗の一派らしい男は顔を怒りの色に染める。

男は腰に下げたカッタラスを抜き、フリッツに向かって構えた。

「ここでやるのか？」

「へっ、今更ビビってんのかあ？」

抜き身の刃物を向け、いつでも斬りかけられる野盗に対して、フリッツが臨戦態勢をとる様子はなかった。

それどころか、またも呆れてため息をつき、頭を掻きながらぼつりと言った。

「恥ずかしいのさ。得物の扱いがなっちゃいねえ奴を相手にするの

「がな」

「ば　馬鹿にしやがって！」

男は、自分を冷やかに蔑むフリッツの態度に、遂に怒りが頂点に達した。

怒号と共に駆け出し、手にした片刃剣を勢い良く振り下ろす！

フリッツは、まず側にいたルートに危害が及ばない様、数歩前に出た

たった一度だけ、金属同士が強く打ち合う音が響いた。

フリッツは、上着の上腕あたりに飛び出していた金属の輪に親指を通す。

それをぎゅっと握って引き抜くと、指の間から4本の金属の“爪”が生えていた。

彼はバグナウ（虎の爪）と呼ばれるそれで野盗のカットラスを受け流し、体勢を崩したところに足を払って倒れさせる。

そして、相手が起きあがるうとするよりも早く、大きな体躯で俯せになった背中の中のしかかり、男の目の前にバグナウを突き立てた。

「ぐ……っ！」

「手前の“爪”くらいしっぴかり研いでおけ。虎さんからの忠告だ」

何時の間にか取りあげた、カットラスの刃こぼれした刀身を見つめながら、フリッツは男に言った。

命を奪われはしなかったものの、先程まで勢いの良かった野盗はすっかり戦意を失っていた。

男には、明らかに実力が違う者を相手にするだけの勇氣を持ってい

る筈がなかった。

フリッツはバグナウを上腕のポケットに差し込み、ずっと片手に持っていた荷袋からロープを取り出して、男の手を後ろに縛った。

剣・ナイフ・農具から派生した鈍器が武器の大半を占めるノイエンドルフで、フリッツの得物はかなり珍しい。

輪付きの金属棒から鋭い曲がった刃生える独特の形状は、まさに爪に引っかかれた様な傷を残す。

それが、野盗達が彼を“白虎”と渾名するもう一つの理由だった。

「すごい……」

「護衛には十分だろうか？」

ルートは感心して呟き、返す彼の言葉にこくこくと頷いた。

見るからに荒くれ者だとわかる野盗の男と、決して退く様子のなかったフリッツを見ていた彼女は、間もなくここに血腥い光景が広がるのかと、戦々恐々としていた。

実際には、前に出たフリッツの立ち回りで、街の長閑な光景が壊れる様な事は起こらなかった。

間近で目にした見事な体さばきは、怖がっていた気分を吹き飛ばし、ただ呆然とさせるものだった。

「一体どうしました？」

「ただの逆恨みだ。こいつの仇でもとるつもりだったんだらう」

男の目的は確かにフリッツの推測も含まれていた。

だが一番の狙いは、これを機会に仲間内での男の格を上げる事だ。

自分の所属する一味の長を斃したフリッツに一矢報いれば あわ

よくば殺す事が出来たなら、
少なくとも一味の中では、間違いなくナンバー・ワンに君臨する事ができる。

仲間という概念が彼らには無いのだろう。

共に悪事を働いていた者の死すら利用して、仮初めの権力を奪い合う。

それが、ノイエンドルフに巣くう盗賊達の、獣のような生態だった。

「換金してくれ」

フリッツは持っていた荷袋を役人に向かって放り投げた。

受け取った者はどっしりとした重みのそれを訝しく思い、ルートの様子を覗き見る。

「こいつの仇」という彼の言葉を今ひとつ理解できていなかった男は、袋に入っていた生首を見て気付いた。

およそ住民とも観光客とも思えないフリッツが、野盗らしき男を組み伏せるまでの経緯を。

「わかりました……ご、ご同行お願いできますか？」

「勿論だ。そんなに怖がるなよ」

怯える男を見て、はははと軽やかに笑いフリッツは立ち上がった。

荷袋を持つ役人とは別に2人ほど、野盗に縄を打って連行する。彼は、その後ろをついて行く。

そして隣には、何か言いたそうな表情でフリッツを見る、ルートの姿があった。

彼女は少し遠慮がちに、小さな声でフリッツに尋ねた。

「……」
「飯は？」
「ああ、すまんな。もう少し後になる」
「ええ〜っ!？」

その後、フリッツは野盗が拘留されるのを見届け、賞金を受け取った。

そして待ちきれない様子のルートを休ませるために、宿場街へ向かい、部屋をとった。

グラウンは領の中心に比べて物価が安いため、比較的質のいい部屋でも安く泊まれる様になっている。

もともと彼は、もつと良い部屋の代金を払ったとしても十分余るだけの金は貰っていたのが

これからゴットホルトまで向かう道中何かがあるか判らない。路銀は節約しておいた方が無難だろうと考えていた。

そもそも、フリッツは一人旅なら宿などとらず野営で済ませている。しかし、今は「良いところのお嬢さん」を抱えている身だ。

そんな事をさせて後で文句を言われるのは敵わないと、彼は気遣って宿を手配した。

「もう少し早く食えないのか？」

「……」

そして現在、彼らは宿の一階にある食堂にて食事をとっていた。日も暮れ始め、かなり遅い昼食なのか早めの夕食なのか判断しかねる時間のせい、客は二人だけだった。

同じテーブルを挟んで、ルートがさつきから直向きに口を動かしている様子が伺える。

まだ昼間に死体を見た記憶が強いのか、肉を避けた野菜ばかりのメニューなのに。

フリッツは自分の注文した品は既に平らげ、ため息混じりにルートを見ていた。

「口にモノ入ってる時に喋らないでよもっ」

「お前さんは食い物の形が無くなるまで噛み砕くつもりか？」

「よく噛まないで歯並びが悪くなるって」

「父様が言ってたよ、か。また」

「違うよ。母様と姉様が言ってたの」

「……さいですか」

どれほど裕福で、そしてどこまで賤しんが行き届いているのだろうか。場違いなほどに……実際に場違いであろう完璧なテーブルマナーには感心させられてしまう。

下品とまではいかないものの、それとは無縁のフリッツにとっては同時に窮屈にも感じた。

「そういえばさ。これからどうしてゴットホルトまで行くの？」

「そうだな……まずは無難にエツフェンベルクまで歩いて、そこでもう一泊する」

ゴットホルトとグラウンを結ぶ街道の上には、途中に1つの都市が

存在する。

二人が出会った時、ルートの口から名が出てきた都市、エッフェンベルクだ。

旅慣れて体力もある彼一人ならば途中で野宿でもして自身の知っている近道を行くだろう。

だが「近道」は街道の様に舗装もされていなければ安全も保証できない。

護る相手が一人であれ、連れて歩くには危険すぎると判断しての「無難な行き方」なのだ。

そして、街道を行くならば、マラソンの様に走るか馬車を使わない限り、一日で目的地には到達できない。

道に迷うほど旅慣れていない 方向に疎いという理由もあるが
ルートと一緒にならば、

フリッツ一人の時よりも時間に余裕を持たせておいた方が良い。

「そっかー。じゃあご飯食べたらお土産買わなくちゃ」

「あのなあ、俺は観光客の案内人じゃないんだ」

「えー？ でも少しだけっ」

「ダメだ。グラウンの街道は安全とは言えない。荷物は最小限で済ませろ」

「むっ」

余計な荷物は、何者かに遭遇し、いざ逃げる時に思わぬ障害となる。また、長距離を移動する際にもその分だけ体力を浪費してしまう事になるのだ。

ルートは今のところ、腰に提げた小さなバッグだけしか持っていない。

それなのに今日の昼は、重い荷袋を背負っていたフリッツに易々と

掴まっている。

金銭の問題ではなく、とても土産など買わせる余裕はないのだ。

フリッツは席を立ち、ふてくされる少女の頭を軽く撫でて部屋に戻るぞ、と言った。

釈然としないままルートも同じように席を立ち、小走りで男の後を追う。

食事は、全て平らげられていた。

部屋に戻ると、明日に備えて荷物を纏めると直ぐに二人は床に就いた。

フリッツはベッドの中で、ふと野盗の事を思い出していた。

一方的な面識を持っているのは、単に彼が有名人だからだろう。

目的も十中八九、男の所属する一味の頭を斃し、縄張りを荒らした報復なのは間違いない。

しかし1つだけ、彼には腑に落ちない点があった。

あの男はどうやって自分の居場所を知ったのか？

ルートとの出会いで必要以上に騒がしく森を動き廻った事で、気付かれたのだろうか？

しかし、彼女を背負って街へ行く時は、普段以上に周囲の気配に注意していた。

道中、ずっとフリッツは誰も尾行する様子など感じなかった。

それに　今思えば、野盗はまるで自分を待ち構えていた様にも見えるなとフリッツは感じた。
目的地など誰にも言わないどころか、グラウンへ向かったのは予定外の行動なのに。

何か胸の内がすっきりしない。

隣のベッドでは熟睡したルートが寝息を立てている。

寝付きの悪いフリッツは漸く微睡まどろんできた意識の中で、妙な感覚だけはずっと抱えていた。

そして、やって来た睡魔と不可解な昼間の男の行動に考えを奪われていたせいで、違和感に気付くのが遅れる。

閉じた瞼を通して感じる窓の外から入る光が、不定形に蠢いているのを感じた時。

それを訝しげに思い、一体何だろうかと目を開けようとする前に。

部屋中に、破碎音が響いた！

第1章：die Einleitung（旅の契約（後書き））

本作品は、サイトで連載している「ゼーレンラント・ストーリー」シリーズの第一部として書いたものを、改めてリメイクしたものです。

少し加筆修正するくらいで大丈夫かなーと思っていたら…… やっぱ最初に書いただけあって、もう読んでられないというか。半分くらい書き直す事になってしまいました。

先に投稿した「Lohenstein」燃えさかる石」と舞台も雰囲気も違いますが、楽しんでいただける様に書きたいと思います。

「何だ？」

フリッツは明らかな異常事態に、慌てて飛び起きた。

窓の周囲が激しい炎に包まれている。

一瞬、何か煙の様なものが外へ飛び出していった様に見えたが、それが何なのか突き止める暇はなかった。

火の元が無い所が燃えているのだから、何者かが故意に火種を投げ入れたのは明らかである。

今はその情報だけで十分だ。どちらにしろ中で眠る二人を狙っての行為には違いないのだから。

「おい、起きろ！」

「んんん？」

簡単に消せる規模の炎ではないと感じた彼は、逃げるためにルート
の肩を揺さ振った。

だが未だ睡魔に支配されている彼女は周囲の気配に気づかず、鬱陶
しく顔を歪めるだけで起きようとしめない。

フリッツは短く舌打ちをすると、毛布を剥いでルートの身体を脇に
抱え、急いで荷物も持ち出して部屋を出た。

「ん……うわっ！ フリッツ何してるのさ!？」

「部屋の中で丸焼きになってる方が良かったか？」

ルートはさすがに驚いた様子で目を覚ました。

まず視界に見えたのは宿屋の廊下、そして見回すとフリッツの胴体、
もう肩脇に抱えられた荷物一式があるのがわかった。

自分の上から焦った声がするのが聞こえてそちらを見ると、男が苦い表情をしていた。

「丸焼き？」

フリッツは抱えているルートを床に下ろし、見てみると開いたままのドアを指す。

少女はその方向を　一面真っ赤に染め上げられた寝室を　見て顔を青ざめた。

「か、かかか火事？　火事だー！」

「判ったならいい。早く逃げるぞ！」

幸いにも今日の宿泊客は二人だけで、宿の主人は火元から遠い部屋にいる。

彼らはそこに行って主人を叩き起こし、事態を告げて直ちに外へと避難した。

数十分後、駆けつけたグラウンの役人達により、火は消し止められた。

消防班と呼ばれる彼らは、消火に特化した魔術を習得しており、彼らのお陰で、宿屋の被害は客室の1部屋が全焼するだけで収まった。荷物も最小限で旅していたため、フリッツは全て持ち出して逃げる事が出来、直接被害を受けたものはなかった。

ただ一人、宿の主人は自分には何も身に覚えの無いのに、部屋を燃やされ、商売に悪い影響を受けて酷く落ち込んでいた。

ルートは気の毒そうに彼を見つめ、側で何か話していた。

少し距離をおいた位置で、フリッツは駆けつけた役人から事情を聞

かれ、彼もまた逆に情報を聞き出していた。

あの時、部屋は窓と扉の両方に鍵をかけて眠っていた。

役人曰く、窓が外から破られた形跡はなく、フリッツが聞いた破砕音は火炎瓶の可能性が高い、と。

しかし外からそれを投げ入れたならば、窓ガラスが割れていない筈がない。

もし扉の鍵をこじ開けて侵入した場合は、その音や気配が手練のフリッツを気付かせてしまうだろう。

「魔法で遠くのモノを燃やしたりは出来ないのか？」

男の問いに、役人は首を横に振った。

火を生み出し、火炎を操る魔術は数多く存在する。

しかし、そのどれもが術者の掌や周囲で行使され、遠く離れた場所に炎を生み出す事は出来ない。

フリッツの想像した“建物の外から、建物の中のある部屋に魔術で火をつける”事は不可能だ。

「だったら誰も火をつけられやしねえ」

「そうですね。人間だとしたら」

「何が言いたい」

あからさまに意味深な台詞を吐く役人の様子が気に食わない……フリッツはそう思った。

立てられる仮説があるのなら、勿体ぶらずに早く言えと、彼が態度で訴えると、役人は口を開いた。

「宿で、不思議な気配を感じませんでしたか？」

「……そういえば逃げる時、煙みたいなモンが窓の外へ出て行った

様に見えたが」

「窓は閉じていたのに？」

苛つきを抑えられずに、フリッツは仏頂面で回りくどい問いかけに答えた。

役人はなおも話の核に触れようとせずに、一つ一つの出来事を明らかにしていった。

恐らくこれは彼の性格なのだろう。悪気があってしている様子は見られなかった。

「実は先程、留置場でも似た様子を目撃しました」

「留置場？」

「はい。此方は放火されてはいないのですが、何者かに鍵を開けられ、留置場に拘束していた男を逃がしてしまったのです」

「誰もいなかったのか」

「こちらの火事の騒ぎに乗じて、隙をつかれてしまいました……お恥ずかしい事です」

「なるほど。こっちは陽動か」

グラウンはそれほど大きい街ではなく、役人の数もどちらかといえは少ない。

今回の様に、夜中にどこかで火災が起こるものなら、たちまち役所の中はもぬけの空になる。

例え1人だけ残っていたとしても、事件に注意を向けて裏をかく事は難しくくない。

「私どもの同僚の中には、それが“幽霊の仕業だ”と言つ者もいるのですが……」

「あの煙が幽霊だ、つてえのか？」

「可能性は否定できないかと」

ここ、ゼーレンラントがいくら幽霊との関わりが深い土地とはいえ、誰もが彼の地へ渡った魂と交流できるわけではない。

よほど感覚が鋭いか、ある種の専門家でない限りは、まだまだ身近な存在ではない。

それ故に、彼らにとってその可能性は、にわかには信じ難い話であった。

「うん、確かにそうかもしれないね」

口を挟んだのはルートだった。

彼女はいつの間にかフリッツの隣に立ち、会話を聞いていた。

「どういう事だ？」

「少しだけ感じるの。幽霊が来た“跡”っていうのかな」

ルートはその場から見える宿の二階の、焼け焦げた窓を見つめて話した。

昼間に見せた子供らしい表情はなく、些か悲しげにも見える目つきは真剣そのものだった。

しかしフリッツはそれを話半分に聞き流す。

彼には役人とルートの言う可能性が信じられなかった。片方は子供の言うことなのだから、なおさらだ。

「……それで？」

「あー。その言い方、僕の事信用してないでしょ」

「信じられるか。そんな事、聞いたこともねえ」

フリッツはにべもなく答えた。

些か不機嫌そうに、それでもまだまだ主張を曲げずにルートは言葉を加

える。

そして、人間よりも幽霊の仕業の方を信じる役人もまた、彼女の手助けをした。

「確かに此岸と彼岸はお互いの世界がはっきり分かれてるからね。

でも、此岸から幽霊を喚びだして操る事ができる人だっているんだ」

「ノイエンドルフには殆ど見かけられません……隣の領土や“裏の業界”では、その類に詳しい魔術師が多いと聞きます」

「俺はマホウの事はさっぱり判らん。だが仮に、万が一、その幽霊とやらの仕業だったら……どう始末をつけさせる？」

野次馬もそれぞれの家へと帰ってゆき、辺りは関係者のみが残っている。

途中からしか話を聞いていないルートは、細い腕を組んで呻った。

最初からフリッツと事件を検証していた役人は、手帳のメモ書きを讀んで、推測する。

そこからルートが、やはり幽霊の類に詳しいような口振りで解決法を唱えた。

「今回の件ですと、目撃された幽霊は召喚・使役されていると考えた方が良いでしょう」

「だったら召喚した人を見つけておしおきすれば大丈夫だよ」

「そんな簡単なモンなのか？ 第一、どうやって召喚主を見つけないんだ」

再びルートは腕を組む。

未だ疑いの目を向けるフリッツに、役人は手帳に挟んでおいた四つ折りの紙を広げて見せた。

「こちらを見ていただけますか」

内容はフリッツがよく見るものだった。紙の大半が人相書きで、その下に罪状と名前、金額が書かれている。顔に見覚えは無いが、間違いなく野盗の手配書だ。それには10万バレンの賞金が賭けられていた。

「この街で一番高い賞金首です。貴方が狩った“首”は、この賞金首が率いる盗賊団の一員。昼間の男は、首領の右腕だったんですよ」「それがどうかしたか？」

「貴方の泊まった宿と、留置所への襲撃ですが　この男で繋がっているのでは？」

ただの手駒ならともかく、右腕ともなる人物が掴まってしまうのは、彼らの“仕事”に差し障りが出る。

しかし助け出そうにも、役人達はそれに備えて留置場を警備しており、一筋縄ではいかない。

ならば　目撃されても存在すら曖昧なものを利用すれば、比較的楽に事を進められる。

フリッツへの襲撃はきつと、多大な被害を及ぼした者への報復だろう。

「なるほど……」

「どうなさるつもりですか？」

役人はフリッツの様子を窺った。ようやく納得した風に頷いた彼は、暫く黙って考えていた。

賞金稼ぎの多くは、金になる“首”を見つければ飛びついていく。自分に被害が及んだとなれば、その仕返しも含めて狩りに行くのが殆どだ。

これで喜び勇んで盗賊団へ殴りこみ、壊滅させられたら自治都市グ

ラウンとしても万々歳だ。

殆ど決まっている様な答えを、役人は期待して待っていた。

「報酬次第だな」

「は？」

「逃げた男と召喚主を捕まえてくれってんだろ？ お前さん方の面子もあるからな」

役人はしまった、と心の中で叫んだ。

日頃の賞金稼ぎ達の受付に慣れ過ぎて、今回は自分達も事件に関わっている事を失念していた。

このままでは自分達の失態をネタに、フリッツに法外な金額を迫られるだろう。

「前金10万の成功報酬20万でどうだ」

「……合計30万！？ いくら何でも高すぎませんか？」

「嫌ならいい。俺はチンケな盗賊なんざ無視して、このまま街を出て行けば済む事だ」

大体賞金首に懸けられる金額は、盗みや放火では2万、殺人で最低5万バレン以上だ。

例え数の判らない盗賊団を相手にするとはいえ、全部で30万バレンは些か高額だ。

余談だが、30万バレンあれば一人の大人が半年は不自由なく暮らせる金額だ。

そんな法外な相場を言われれば、聞いた役人が目を丸くするのも無理はない。

案の定足元を見られた役人は、頷く事しか選択できなかつた。

剣の訓練は日々行っているとはいえ、自ら盗賊団に立ち向かう勇氣など、彼には無いのだから。

「わ、わかりました」

「よし。交渉成立だ」

この街にとって、その盗賊団がどれほど脅威であるのかは、彼には何の興味も無かった。

逃げた男も、昼間に刃を交わした時の手応えで、大した実力ではないと思っっている。

きつと首領もさほど強くはないと、フリッツは考えていた。

そんな奴らを相手にして30万もの大金を手に入れられるのだから、楽な仕事だ。

役人の同意の言葉を聞いて、フリッツは満足そうに頷いた。

「僕も一緒に行くよ」

「直ぐ戻る。ルートはここで大人達と待つてる」

「そんな訳にはいかないよ。僕が必要になると思うし」

「悪いが冒険ごっこに付き合っつもりは無え。俺はお前さんを無事に家へ届けるのが仕事だ」

至極もつともな意見をフリッツは言った。

しかし、興味本位で言っではないのに、軽くあしらう態度にカチンときたルートは、無言で宿屋の方へと向かっていった。

フリッツはそれを見てへそを曲げても諦めてくれたのだと思い、役人にあいつを頼むと言う。

そして彼が仲間の役人から調達してもらった前金を手に、旅の支度し始めた。

しかし、手元にあつた筈の荷物が一式見あたらない。確かに火事場から持ち出した筈なのに。その後ルートに持たせていたのだろうかと思い、宿屋の方を振り返る。

すると何やら2つの人影　1つはルートだと確信した　の間に、自分の荷袋らしい物が置かれているを見た。

「まさか……！」

フリッツは慌ててそこへ駆け出す。

確かあの荷袋には、昼間に貰ったばかりの賞金が入っていた筈だ。

「ごめんねおじさん、僕達のせいで商売できなくなっちゃって」

小太りの体に丸い顔をした宿屋の主人は、ルートに向かって頭を下げている。

彼の掌には1000バレン札百枚の束が置かれ、それを覆うように彼女の手が乗せられていた。

主人は彼女にありがとう、と何度も礼を言つて目に涙を溜めていた。

「遠慮なく使つてね。僕達の事は心配いらなから！」

「待て、これは俺の」

「大丈夫だよねー？　今から悪者やつつけに行つて賞金いっぱい貰うんだから！」

フリッツが割つて入ろうとした時、言葉を遮つてルートが彼に向かって強い口調で言った。

顔は笑っていたが、ルートの額に青筋が見えた気がする。

フリッツは勝手な彼女の行動に気を悪くしたが、何となく彼女の言

自分を理解した。

自分の事ばかり考えないで、他人の足元ばかり見ないで、まず巻き込んだ者に償いをしろ。

子ども扱いするのなら、そのくらいの事をしてみる　彼女の目がそう訴えていたのだ。

しかしフリッツの方も黙ってはいない。

ルートの無言の訴えに一理あったとしても、彼女の行動を正当化する理由にはならないのだ。

宿の中へ戻っていく主人を見送った後、彼は低い声でルートに尋ねた。

「お前……自分のやってる事、わかってるか？」

「うん。人のお金を勝手に使っちゃったね」

森の中で会った時など、ほんの少しの言葉で怯えていたというのに、今のルートは強がっているのか、同時にせぜにさらりと答えると、わざとらしい演技で言った。

「うわあどうしよう、弁償しなくっちゃ。でもこんな大金、僕では払えないなあ。そうだ、盗賊退治に協力してお礼を貰おう！　半分なんて厚かましいけど、3分の1でも貰えば十分に弁償できるしね！　うん、これだ！　もうこれしか僕に残された道は無いのだった！　つづくー！」

「……おい」

「というわけで、僕は賞金稼ぎをしなくてはならなくなりました。護衛のフリッツさん、よろしくね」

彼女はフリッツに背を向け、大袈裟に頭を抱えて困ってみせる。

かと思えば既に考えにあつた事を、さも今閃いたかの様に口にして、拳で掌をうつ。

ひとしきり演じきつた後にフリッツから呆れた声がかかると、ルートは可愛らしい仕草で振り向き、笑顔を見せた。

対するフリッツは仏頂面のままだ。

彼はどんなに彼女が駄々をこねようと、命のやりとりが起こる“戦場”に連れて行くつもりはなかった。

「さつきも言ったが」

「僕を“無事に家へ届ける”んでしょ。僕はこのまま黙ってエツフエンベルクなんか行かないよ。もし会った時みたいに僕を抱えて連れて行くつもりなら、ずっと“助けてー！この人さらい！”って暴れてやるんだから」

ルートの言葉はなお続く。

フリッツは黙って彼女の主張に耳を傾けた。

「それに父様が言つてたんだ。人から借りたものは必ず返しなさい、つてね。フリッツにお金を返さなくちゃ、まっすぐ家に帰つても父様と母様からすっごく怒られちゃう。それこそ無事じゃすまないよ、僕にとつては」

それがとつてつけた理由なのは明らかだ。

しかし、それほどまでに盗賊の壻へ行きたがる彼女を見てみると、役人との会話に割つて入った時の言葉が真実なのだろうと感じさせてくる。

幽霊を使役する盗賊など聞いたこともなかったが、とはいえ全てを否定するのは危険な事だと感じ始めた。

「……恐れ入ったよ。お前さんには」

観念した様にフリッツは言った。

絶対に自分から離れない事をルートに約束させて、二人は盗賊の塹^{ねぐら}へと向かう。

日頃は無邪気にはしゃぐ彼女も、この時ばかりは神妙な顔で頷いた。

暫く時が経った。

夜の闇に紛れて、森の中を大小二つの影が動いていた。

大きい影は前を歩き、時折小さい方がちゃんと後を付いて来ているのか注意を払う。

しかし大きい方は終始無言で、いくら状況が楽しいものではないとはいえ、少し息の詰まる雰囲気があった。

「怒ってる？」

「俺の機嫌が気になるなら、最初からあんな事をするんじゃないねえ」

小さい影の主、ルートは夜の静寂を破って音を発した。

それを拾って大きい方、フリッツがややふてくされた風に言葉を返す。

この時になって、やっと自分の行いを後悔してくれたのかと思いき

や、そうではなかった。

「やっぱりまだ怒ってるんだ。僕はもうすっかり機嫌直したのに。大人気ないなあ」

しゃあしゃあと言い放つルートの言葉に、フリッツは閉口させられるばかりだ。

彼女は対照的に明るい口調で、グラウンで彼に語った主張をもう一度口にする。

「それに……僕が必要になるかも、っていうのは本当の事だよ」

「へえ。それは大変だな」

「やっぱり信じてないね」

ルートは肩を落として言った。

己の常識の中にない事実は受け入れ難いものだ。

それが子供から発信されたものならば、特に大人たちは疑いの目ばかり向けるだろう。

今のフリッツの態度が、まさにそうであった。

「はいそうですかと簡単に信じられるか」

「もしかして人間不信？ 僕でよかつたら相談に乗るけど」

「はいはい。また今度な」

フリッツは彼女の言葉を適当にあしらって前へ進む。

そして彼はルートに「お喋りはここまでだ」と言うと、まだ視界の開けない森の中で立ち止まった。

彼はその場で屈み、生い茂る草木と太い木々に隠れて遠くの様子を伺う。

視線の先には、山肌に空いた洞窟の入口と、その前に立つ見張り番

らしき男が二人いた。

ルートも彼を真似して屈む。

彼女の目にも洞窟の光景は映っており、これからフリッツが何をする気なのかは予測できた。

「合図するまでここで待ってる」

同行する気であったルートだが、男にはそれを望まれていない。

彼女はフリッツが未だ自分を信用していない事に腹を立て、少し強めの口調で反抗した。

「自分の身を守るくらいならできるって」

「強がりはいい」

「もう！ 証拠だってあるんだから！」

見るからに折れそうな細い腕と足、華奢な身体でどうやって自分の身を守るのだというのだろう。

仮にそれが真実だとしても、はいどうぞと野盗達の前へ行かせるわけにもいかない。

彼女以上に野盗の腕が立つ事だって、十分に考えられるのだから。

口で言うのは簡単だ、と突っぱねようとしたが、その代わりにフリッツは皮肉を返した。

「今度は父様に護身術でも教わったのか？」

ルートは彼の問いに応じなかった。

徐に立ち上がり、目を閉じて構える仕草は、何かのために精神を集中させている様に見えた。

フリッツの聞き慣れない、しかし流暢である事はわかる呪いのよう

な言葉が羅列されてゆく。
途切れる事なく続く呪いましなの様な呟きを続けてまま、ルート徐に駆けだした。

「おいっ
」

茂みを揺らし、森が途切れるギリギリまで盗賊との距離を詰め、逆にフリッツからは掴まらない様に離れる。
ルートはそこから急に態度を変えて、キョロキョロと辺りを見回しながら森を抜け出た。

そこは洞窟の真正面だった。当然、野盗達はルートの姿に気がつく。彼女はそれらと目が合ったとたん、前に蹴躓けつまういて転んでしまった。訝しがる野盗達は何者が確かめるため、二人とも彼女の方へ向かってきた。

「何だあ？ ガキか？」

野盗の一人がルートの姿を見て口を開く。

「くそっ！」

フリッツは出来るだけ音を殺しながらルートのいる場所へ向かう。
最初は何かの作戦かと思っていたが、どうもその様子が感じられない。
い。

更に厄介な事になる前に、彼は強行突破を決めた。

フリッツがそこへ来るよりも先に。

野盗の一人は、何故か立ち上がるうとせせず地に伏せたままのルートの腕を掴み、引っ張り上げた。

その光景を目にした彼の額に汗が滲み出る。
無理矢理起こされたルートは、自ら動く様な気配は未だなかった。

「「ルートル」
昏睡幻術」

しかし、彼女の口から声が聞こえた。

もやの様なものが、彼女が手をかざした方向に生まれ、空気を波打たせて進んでいく。

それは瞬く間に至近距離にいた野盗達の体の中に溶け込み　二人をその場に崩れさせた。

「明日の昼までお休みなさいっ」

ルートルは倒れた時に服に付いた土埃をはらいながら、小さい声で言った。

彼女のとった行動は、やはり野盗達に近付く事と、彼ら油断させるのが目的だった。

不意打ち・騙しが日常の世界にいる物達の虚を突くには、油断を誘いやすい子供だとしても容易くはない。

ルートルは、彼女の行使する魔術から決して逃れられない極限の距離まで、彼らに近づく必要があった。

それで、同行者のフリッツがひやりとさせられる程に危険な真似をしたのだった。

思惑通りに事が進んで、彼女はしてやったりという表情でフリッツを見る。

見られた方は、森の切れ目であっけにとられた顔をしていた。

「……お前さん、魔法使いだったのか」

「ちょっと違うけど、そんなところかな？」

えへへ、とはにかんだ笑みからは想像もつかない能力だった。
彼女の言う「僕が必要になる」というのは、この事だろうか？

ともあれ、ルートが自己防衛の術とそれなりの度胸は持ち合わせている事がわかった。

少なくとも潜入した洞窟の中で、フリッツの足を引っ張る事にはならないだろう。

それだけで、彼の感じていた責任感の様な不安な気持ちは軽くなつた。

あとは実戦で彼女がどれだけ動けるか……。

生首を見て気を失う彼女が、刃物同士が交じる世界を見て平然としていられるだろうか。

戦闘中に無防備になってしまうのが、彼にとって最も心配な事だった。

しかし見張りを眠らせた以上、ここでまごついていたところで自体は好転しない。

フリッツはルートに一言告げて釘を刺しておき、一応は彼女が自信を持つ“魔法使い”の力を信じる事にした。

「だが油断するな。中へ入るぞ」

「うん」

フリッツは森に無数に生えている丈夫な蔦を適当に斬っていく。
それを縄代わりに使い、念のために眠っている二人を縛っておき、洞窟の奥へと入っていった。

「そう。ありがとう」

一方、その頃。

とある屋敷の廊下では、一人の魔術師らしい女が礼を言っていた。しかし呟くような声を出した彼女の目の先には、誰も居なかった。虚空に向かい微笑む女は、青灰色の髪を揺らし、踵を返す。

そして廊下に敷かれた絨毯の上を、姿勢良くきびきびと歩いていた。

「よりによってあの人と一緒……」

その表情は明るくなかった。

深刻というよりも、そわそわと落ち着かない様な気持ちに近い。

今度は本当に誰に向けているわけでもない言葉を落とし、彼女はため息をついた。

「変な事、吹き込まれないかしら」

夜に潜入したというのに、洞窟の中は想像よりも明るかった。自然に作られた空間をうまく生かし、岩壁を加工するなどして、居住性を高めている。

壁に埋められたランプの光で通路すら十分な明るさがあった。そのお陰で、フリッツ達は内部の散策に苦勞する事はなく、あつという間に奥へと進む事が出来た。

「お前が白虎か！」

「邪魔だ」

廊下の様な細い道に金属音が響きわたる。

フリッツは、腰に提げた二振りの変わったナイフを手に取り、それで野盗達と切り結んだ。

「こ、この野郎……！」

「臆病者はとつとと逃げてろ。鬱陶しい」

彼の持つナイフの握りは拳を覆うように出来ており、加えてナックルのような突起が着いていた。

フリッツは野盗の振りかぶった曲刀を軽くいなすと、ナックルの部分を相手の鳩尾に強く打ち付けた。

倒れ込む男を担ぐと、彼は続いて後方に控えていた別の野盗に向かって駆ける。

「おらッ！」

徐に倒したばかりの男を投げつけて盾にし、フリッツは相手へ肉迫

する。
思わぬ攻撃をとっさに避けた野盗は、それによって生じた隙を白虎につかれた。

牙をむいた獣が獲物に向かって大きく口を開ける様に、フリッツは両腕を開く。

野盗と目が合った瞬間、彼はにやりと笑い、両手のナイフを男のこめかみに深々と突き刺した。

鈍い音が野盗の頭蓋を通り抜け、男は瞬く間に白目をむいて力を失った。

フリッツがナイフを突き立てている時、彼は背中から遠い足音を聞いた。

どこに潜んでいたのか、フリッツ達の後方から別の野盗が追いかけてきたらしい。

「プラスチックボール
爆風弾！」

しかしその男が間合いに入るより早く、フリッツ後ろにいたルートが何かの魔術を放った。

目をこらして見れば丸く見える透明の球体は、風景をねじ曲げながら、人が走る程度の速さへ前へと進んでいった。

フリッツ達に気を取られていた野盗はその事に気付かなかったのだろう。

大振りのダガーを握りしめ、振りかぶった途端に、彼は違和感に気付いた。

ドン！！

「うおおあつ！」

圧縮された空気の弾丸は野盗の腹に触れた瞬間、爆風へと姿を変えた。

距離のあったルート達には少し強い風にしか感じなかったが、風の生まれた場所にいた野盗は、その体を易々と持ち上げられ、後方へと吹き飛ばされた。

おまけに細い洞窟で生み出された風は広場よりも収束し、ひときわ高い威力を持つている。

受け身をする余裕すら与えられず、男は硬くごつごつした石の床に後頭部を強く打ち付けた。

サドウンガスト
「魔陣風！」

「何ッ!？」

ルートは続いてフリッツの前方に異なる魔術を行使する。

今度は最初から強風の形をとり、強い勢いで前へと突進していった。

彼女は自分が血や死体が苦手だという事をちゃんと知っていた。

フリッツと出会った時は、突然グロテスクな光景を目にしたために気を失ってしまったが、

最初から覚悟をしていれば少しくらいは平気だと、自分の心を把握していた。

そんな彼女は、極力その光景を見ない様にと、フリッツの手元を目線から外していたのだ。

代わりに遠くの様子を見たり、彼に背をむけていたり、自然と周囲を警戒する視線になっていた。

それがこの状況を有利に運ぶ事となり、ルートはいち早く魔術を唱え、野盗の攻撃を防ぐ事が出来た。今の魔術を行使したのも、フリッツの目線では死角になっている場所から、野盗がボウガンの矢が放つ のを見たからだ。

風はボウガンから放たれた矢を何なくうち払い、驚愕する野盗の体勢を崩す。

その隙にフリッツは瞬時に男の懐に飛び込み、鳩尾にナックルの一撃を見舞った。

「がはっ……」

「下っ端は大人しく寝てろ」

攻撃は殆ど全てフリッツに向けられていた。

そうして彼が敵の注目を浴びる事で、ルートは比較的安全なままでいられた。

下手に彼女に目をむければ、たちまち白虎の牙の餌食になってしまふ。

そうでなくても油断ならない相手なのに。

フリッツとルートは、分岐のない石の道を奥へ奥へと駆けていった。進んでいく程に、敵と遭遇する時間の感覚が広がってゆく。

恐らく前衛として配置していた“下っ端”達を片付けてしまったのだろう。

これより先は精鋭達が彼らを出迎えるのかもしれない。

ルートは倒れた野盗の横を走り抜け角を曲がると、その先にあるものに気付いてフリッツの名を呼んだ。

彼女は指をさす。そこにはびっしりと苔が生えた厚い岩壁があるの

みで、他には何もなかった。

「あれえ、行き止まりだよ！」

ルートは自分一人ならいざ知らず、フリッツの後をついて来たのに道を間違えた筈がないと思っていた。

彼女のイメージには、今まで歩いてきた洞窟の先には広い空間があり、そこに野盗達の壻がある。

しかし、目の前の光景は彼女の想像と大きく異なっていた。

フリッツはルートの隣でまじまじと岩壁を見つめる。

床の方から天井までじっくりと眺めた後、彼はぼつりと呟いた。

「……違うな」

「え？」

ルートに見ると言い、フリッツは岩壁の中心についた苔を払い取ると、下からは岩壁に刻まれた亀裂が姿を現した。

だがそれは自然に出来たものとは考えられない程くつきりと刻まれており、かつ真つ直ぐに伸びている。

彼が更に上下の苔を払っていくと、奇妙な亀裂はやはり一直線に、天地に向かつて進んでいた。

ルートは興味深げに亀裂に顔を近づけた。すると、彼女の前髪が僅かに揺れるのがわかった。

「すきま風？」

「はあ。素人がこいつらは」

フリッツは言った。

手入れがなされた道の突き当たりだけが苔生している点は明らかに

おかしい、と。

しかも、まるで何かを隠す様にびっしりと綺麗に苔が貼り付いているのだから、何者かがとっさに細工したに違いない。その奥から亀裂が見つかったのが、何よりの証拠だ。

「そっかー」

暢気な声でルートは納得した。

フリッツは一步前に出て、勢いよく岩扉を蹴り開けた。

普段から使われる扉だからか、さほど重くもなくすんなりと開き、奥の様子を見せる。

そこには見覚えのある顔を青くして狼狽えるごろつきと、黒い表紙の本を片手に持った男が並んでいた。

小さなホール程度はある大きさの部屋の隅には、盗品が文字通り”山の様”に積みまれている。

そのうち裏ルートで商人に売り払うのだろう。殆どが装飾品や宝石の埋められた置物だ。

部屋の中程に立っている二人のうち、昏間に見た方がひどく慌てた声で言った。

「頭、あいつです！あいつが白虎ですよッ！」

「うるせえ。見りゃ判るだろうが！」

使えない部下たち。

最奥部まで侵入を許した事。

視界に現れた、裏の世界で“悪名”の通った男。

それらに対する焦りや苛立ちで、頭と呼ばれた者は、隣で狼狽する男を怒鳴りつけた。

「俺を馬鹿にしてんなら、もう一度ぶん殴るぞ？」

怒りを露にした返答を聞いて、昼間のごろつきは怯えた様子ですみませんと謝った。

顔が少し腫れているところを見ると、どうやら脱獄後に頭から仕置きでもされたのだろう。

グラウンで男を見ていたルートにとって、今の従順な様子はあまりにも滑稽だった。

「あんなチープな扉の隠し方しか知らねえんだったら、馬鹿にしたくもなるだろうさ」

「何だと？」

「おっと、独り言が聞こえちゃったか。そいつは悪かった」

独り言のわけがない　それはこの部屋にいる誰もが判っていた。フリッツのあからさまな挑発は野盗の頭の顔を怒りの色に染めさせた。

彼の飄々とした言葉と仕草は、見ているだけで追い詰められた野盗達の神経を逆撫でする。

しかし、頭は大きく息を吸い、気を静めようと努力する。相手のペースに乗るまいと思ったのか、まずは平常心を取り戻そうとした。

ある程度怒りを抑えられたところで、頭はフリッツを睨低い声で言った。

「……俺を只の野盗と思うなよ」

「思つてないさ。只の野盗はもつと利口だ」

「この野郎！その口、二度と聞けない様に」
「待て！」

フリッツはなお野盗達を挑発する。彼は早くこの騒ぎに片をつけた
いのだ。

それは長引けば不利になるという事ではなく、単純に“面倒事”だ
から。

さつさと賞金首を突き出して報酬を貰い、隣で様子を伺うお嬢さん
をゴットホルトへ届けたい。

彼の頭の中には、自分の報酬の事が第一にあった。

フリッツの挑発に、頭はまたもや顔を紅潮させた。

しかし今度もそれに乗ることはなく、先に堪忍袋の緒が切れた部下
を逆に制した。

「……まあ待て」

妙に辛抱強く、最後まで斬りかからなかったところは、本人言う通
り「只の野盗」とは違っていた。

フリッツが先程からわざと挑発しているのは、正面から向かってく
るのを誘っているのもあった。

冷静さを欠いた直情的な攻撃ほど、パリングを得意とする彼にとつ
てやりやすいものはない。

しかし、野盗の頭には何か切り札でもあるのか、落ち着きを取り戻
した言葉には余裕の色が見えた。

彼の手には一冊の黒い表紙の本がある。

分厚い頁数のそれには、真ん中のあたりで男の親指が挟まれていた。

「どうせ今から死ぬんだ。好きに言わせてやれ」

頭は不吉な言葉を吐くと、勢い良く本を開いた。それを合図に、彼の周囲にもやの様なものが出現する。

白みがかった“もや”が広がっている光景を見た途端、ルートは目を見開き、顔色を変えた。

「葬怨霊獣。血肉を喰らう者共よ、我が声に従って河を越え主の元へ集え

「ネクロマンシー
死霊術！」

頭は開いた本を体の前に持ち、そこに書かれた呪文を唱えてゆく。そしてルートの叫んだ言葉を耳にすると、口の端をい、っと吊り上げた。

男の言う「切り札」とは、これの事だった。

空气中をわだかまっていた“もや”は次第に収束し、様々な獣の形をとる。

体は白い煙の様なもので出来ており、頭が呪文を唱え続ける間、1匹、また1匹と増えていった。

ルートにはその光景の意味が理解できたのだろう。

怒りと嫌悪の表情で男を見る彼女の額には、軽く汗が滲んでいた。

「知っているのか？」

「うん。彼岸の者を無理矢理召喚させて命令する、酷い魔術だよ」

「利口だな。坊主　おっと、嬢ちゃんだったか」

フリッツの問いにルートが露骨に嫌悪を含ませた声で答えた。

そして頭の横にいるごろつきがそれに対して口を開く。

汚い優越感に浸っているのか、男は顔を歪める少女を見て楽しんでいる様だった。

この領土には大別して3種類の魔術が存在する。

今の現象を起こしているのは、呪いや破壊を司る“黒魔術”と呼ばれるものだ。

その中の一種、死霊術^{ネクロマンシー}は、此岸^{このよ}での生を終え彼岸^{あのよ}へ渡った靈魂に干渉する魔術だ。

幽霊を死体に憑依させ、不死生物^{アンデット}を創造したり、幽霊そのままを従わせ意のままに操る事が出来る。

目の前で行われている様に、最初から悪意ある存在を召喚する事すら可能なのだ。

それ故に、あまりにも倫理から外れた魔術として、多くの魔術師から忌み嫌われていた。

だが黒魔術は最も扱いが難しく、魔術の理論を把握している魔道士が自ら研究し、作り出すものだ。

人から教わるものではなく、ましてや本を読むだけで行使される様な簡単なものでもない。

そもそも、この領土^{ノイエンドルフ}は黒魔術に関わる事自体が禁じられているというのに。

「その通り、コレは刃物が効かねえ、俺の言うとおりに動く、人だつて殺れる怖い魔術だ」

「でも、それって……」

「そうさ。並大抵の人間になんざ使えねえ。意味わからねえ言葉だらけだもんね」

男は呪文を唱え終わると、本を地に置いた。開かれた頁に書かれた魔法陣の様な術式は、術者の手を離れても鈍く輝き続けていた。

漆黒の輝き、と言うと矛盾している様だが、そうとしか形容し難いその光は不気味な様子を放っていた。

大人の上半身程大きさの幽霊達は、ふわふわと漂いながら獣の様な唸り声をあげている。

頭の言う事が正しければ、それらはきつと召喚主の一声で直ちにフリツツとルートへ襲い掛かるだろう。

出会った時の様子と打って変わって、頭は余裕を持った表情で語った。

「だがこの本さえあれば、ジュモンを読むだけで楽に黒魔術が使えるんだよ！」

「つまり本は凄いがお前さんは只の能無しってえ事か」

「俺を能無しと言うな！ こいつらに命令だって出来るんだ！」

頭がパチン、と指を鳴らと、喚び出された幽霊は召喚主である彼の両脇にやってきた。

召喚された幽霊はただ主の命令に従うだけで、それ以外の自発的な行動は起こさない。

威嚇の声をあげても、指示があるまでずっと待機しているのだ。

そして今、主が標的の侵入者二人を指さし、命令を下した。

「あの銀髪の男と子供を殺せ！」

既に何度もこの本を使い、幽霊を使役しているのだろう 例えば、

先程のグラウンで起きた事件の様に。
自ら考える力も、意思もない幽霊のために、実に簡潔で的確な指示を出していたのが何よりの証拠だ。
野盗の頭の言葉を合図に、幽霊は競う様にして二人へ接近する。
獣の本能か、やはり背が低く華奢に見えるルートの方へ攻撃が向けられた。

フリッツは彼女を何とか護ろうと身構えたが、相手は刃物の通じないと言われる幽霊である。

接近戦を得意とするが魔術を一切使えない彼に対抗する手段は何もない。

一体、どうすればいい。

彼はふと視線をルートに向けると、目を瞑り何か呟いている姿が目に入った。

彼女は“魔法使いのような者”だ。きっと、自身に襲いかかる幽霊への対処方法を知っているのだろう。

邪気爆滅。彼の地より来る無法者に制裁を、迷い人に救いの道を与えよう

ルートは目を開き幽霊を睨む、そして空中に印を結んだ手を開き片方の掌を地に向けた。

綺麗な発音で唱えられた呪文と刻んだルーンは、術者の最後の言葉で力を発揮する。

「パニッシュ退魔光！」

突如、視界に捕らえた幽霊の真下から眩い光の柱が現れ、対象を撃ち抜いた！

それはカメラのストロブ程度の間しか発光していなかった。

だが、たったそれだけの時　その場にいた全員が光に目を灼かれる間　まさに一瞬で2体の悪霊を消滅させた。

「は……い？」

「もう。ちゃんと僕の話聞いてよ」

頭の優越感も、瞬く間に消え去ってしまった。

あっけにとられる彼を見て、光の柱を生んだ術者が頬を膨らませている。

一体、何者なんだ？

魔術の世界とは縁遠いフリッツと、ルートをただの子供だと思い込んでいた野盗達の頭に、同じ疑問が浮かんだ。

ルートは呆然とする自分以外の様子など気にも留めず、さっき頭に遮られて言えなかった言葉を語り出した。

「あのね、あなたが唱えた魔術は低級霊を喚び出すものなの。食欲しかない、獣みたいなものかな」

あたかも出来の悪い生徒を叱る教師の様に、ルートは人差し指を立てて言った。

特徴的なうなり声をあげ様々な獣の形をとっていた悪霊達は、人や獣にかかわらず、

怨みや貪りだけが寄り集まって形を持った“思念体”のようなもの

であつた。

単純な欲求のため集まりやすいが、逆に“散らす”事も容易い。

「悪いけど、このくらいなら僕だつて除霊できるよ」

「エクソシスト え、除霊師!？」

「そつだよつ。まだ見習いだけどね」

自信を持って言ったルートの言葉に、頭はひどく驚愕して叫んだ。例え道具の力を借りているとはいえ黒魔術に手を出しているのだから、その存在は知っていたのだらう。

彼岸の者と語らい、彼らを時には導き、時には断罪する此岸の番人。死霊術と対極をなす破邪エクソシズム法術を専門的に使いこなす存在。

ノイエンドルフで生まれた異端の白魔術師が、エクソシスト除霊師だつた。

この領土は保護・再生・破邪を司る白魔術の発祥の地である。

各都市の司祭は例外もあるが大抵が熟練の白魔術師で、僧侶達の修練する教会が各地に点在する。

その中では、除霊師の地位はそれほど高くはなかつた。

彼らは生業の上で悪霊に憑依された人間を葬る事もあるため、僧侶より遙かに多くの血を流すからだ。

しかし、悪霊の被害に遭つた事のある民からは僧侶や司祭よりも尊い存在として敬われているのも事実である。

ルートは野盗の頭に向かつて、ぺろりと舌を出して答えた。

謙遜ではなく、本当に彼女は見習いである身なのだらう。

だがそれでも、繰り出す魔術を目の当たりにした今、野盗達にとっては最大の脅威だつた。

「あのガキに魔法を使わせるな!」

「へい！」

切り札と思っていた幽霊があっさりと倒され、後の無くなった頭目はさすがに焦りを見せる。

部下に指示を出すと、自分は床に置いていた黒皮の魔術書を再び手にした。

部下の野盗は、曲刀を掲げてルート目がけて駆け出した。

これが少女一人だったら形成逆転したかもしれない。

しかし野盗にとっては運悪く、標的は通り名までついた凄腕の賞金稼ぎと共にいる。

望んではいなかったが、男が脳裏に描いていた通り、フリッツは男とルートの間立ちふさがった。

グリッブナイフ
護拳刀はいつの間にか鞘に仕舞われ、代わりに彼の両手には虎の爪が装着されていた。

フリッツは野盗の曲刀を真っ向から受け止める。ギリギリと金属同士が擦れ合う音が聞こえていたのも、わずかな時間だった。

最初から恐れる気持ちを露にする者が、仲間を護ろうとする者の気迫に勝てる筈が無い。

一瞬の均衡を保っていた野盗は、白虎の持つ鳶色の眼光に射抜かれ、怯んでしまった。

フリッツはバグナウの動きで剣の軌道を外側流した。

生じた金属の悲鳴は代わって野盗の声なき断末魔となる。

フリッツは喉元を刎る一撃で男を倒し、続いて魔術書の頁を必死にめくる野盗の頭に向かっていった。

「っ……………！」

「悪く思つなよ」

丸腰同然の男の顔からは、既に戦意が失われていた。魔術の利点は人間の肉体では到底不可能な現象を引き起こす事だが、欠点として即時に行使できるものは殆ど無い事が挙げられる。折角の黒魔術も、対応しきれないほどの接近戦になると本来の力を発揮できないのだ。

フリッツはにやりと笑みを浮かべ、頭の左胸にバグナウを深く突き入れた。

「大丈夫か？」

「う……うん」

絶命した男の倒れ様にバグナウを引き抜き、フリッツはポケットから取り出した布で爪を拭った。

ルートの目の前で豪快に野盗の喉もとを裂いた事が気にかかって、彼女の様子を伺った。

返事は町で聞いた声よりも些か弱く、そして震えている印象を受けた。

無理もない。気絶しなただけ立派だとフリッツ思ったが、同時にやはり連れてくるのではなかったと後悔した。

ルートは倒れた者達を視界に入らない様に、遠くの魔術書を見つめる。

フリッツはその間に、地面に転がる野盗をひきずって端にやる。

そして、見苦しくない様に盗品の山に被せていた布を取り上げて死体に被せた。

屍がある事には変わらないだろうが、視覚的には随分違ってくる。

しかしその甲斐もなく、ルートは蒼い顔をしていた。

「だからお前さんは」

待ってると言ったんだ。

その途中で、フリッツは言葉を飲みこんだ。

少女の視線をゆっくりと追うと、ずっと見つめていた魔法書がある。魔法書は　意思を持っているかの様に、ぶるぶると震えていた。

頭の手から落ちた事で、今は表紙を上にして地面に伏せられていた。それがじわじわと動いてゆき、まずは本がしっかりと閉じられた状態になる。

「おい……何だこれ？」

フリッツの問いに、ルートは首を横に振る。

彼女も何が起きているのか検討もつかないのだ。

本は続いて重たそうに自らの身を広げる。

ばさり、と音をたてて、表紙とともに数頁が開かれた。

風も吹いていないのに頁がめくれていく。

どこか目的の頁を探す様に、規則正しい動きで頁が進んでいった。

「まさか、本が勝手に」

「……そうだ、きつとそうだよ！」

フリッツの推測にルートが同意して叫ぶ。

彼女の脳裏にはその根拠も浮かび上がってきた。

そして時を同じくして、魔術書は動くのをやめた。

代わりに、頭が呪文を唱えていた時の様な漆黒の輝きを見せ始める。

「あの人、呪文を読むだけって言ってた……きっと本が死霊術の効果を残して持ってるんだよ」

魔術書の周囲からもやが生まれる。

それは頭が操っていた時よりもはるかに多く、歯止めが利かなくなつた様に止めどなく溢れていた。

「魔法の効果？」

「うん、どこの誰か知らないけど、本に術式　呪文と魔法陣を全て書き上げておいて、後は持った人の意志と簡単な呪文だけで召喚できる様にしたんだ。多分そうだと思う……」

魔術の行使に必要なものは、術者の意志・術の意味を表す呪文や動作などである。

召喚魔術の場合は、それに加えて魔法陣が必要となる場合が多い。

呪文や印は一つ一つの言葉・動作に意味があり、まとめて術式と呼ぶ。

それらは、ほんの少し変わるだけで魔術の効果に影響が及んでしまうほどだ。

逆に言えば、呪文の真意を理解する者は自由に組み替えてアレンジする事が出来る。

その魔術書の作者は巧みに術式を組み替え、声一つで幽霊を召喚できる様にしたのである。

使用する者の、魔術の心得の如何を問わず。

もやが獣の形をとり始めた。ざっと見ただけで10匹はいる。フリッツは苦々しい顔で舌打ちした。

「チツ……これじゃあ俺の方が足手まといだ」

いくら低級だろうとも、彼の持っている武器では幽霊を傷つける事は不可能だ。

彼にはやがて襲い掛かる悪霊たちをただ睨んでいる事しか出来なかった。

ルートの推測が当たっているならば、あの物騒な魔術書を破ってしまえばこの現象は収まるだろう。

しかし、どうやって。

「レディアンズエッジ
光輝魔刃」

フリッツが悪霊達と睨み合っていると、突然、背中にルートの掌の感触を覚えた。

錯覚ではなく、彼女は何かの魔術を行使するために彼の背中に触れていたのだ。

彼の身体の周囲がしゅく輝いていく。そして光はフリッツの持つバグナウに収束されてゆき、留まった。

「これで持つてる武器で幽霊を切れるよ。あの本を何とかしよう！」

魔術を習得するのは容易ではない。

そこで、物質を介し誰にでも魔術の効果を発現できる様にする技術

を、魔術師達は研究していった。

物質に魔術を付与する技術“エンチャント呪鍛封呪”は、破邪法術にも役立てられた。

今ルートが唱えたものは、対象であるフリッツの精神力を刃と化する魔術だ。

肉の器を持たない精神体である幽霊に対抗できる手段だった。

召喚された悪霊達も臨戦態勢は整っている様だ。

今度は術者が存在しない。故に、行動のきっかけはそれら自身に委ねられている。

「任せる。獣狩りは得意だ……こいつらは食べやしないが」

双方とも殺気を漲らせ それを合図に、戦場が動き出した。

フリッツは地を蹴って進み、すれ違い様に幽霊をなぎ倒していった。通常の武器で幽霊を攻撃しならば、まるで煙を斬った様な感覚しかない。

「少し傷を付けられる」銀の武器でさえ薄紙を斬った程度の頼りない手応えしか感じられないのだ。

しかし、レイアンスエッジ光輝魔刃による刃では、生身の人間と同じ斬った感触が手に伝わってきた。

見た目はたよりのない霧の様な存在だが、本来なら此岸の者と同じく弾性のある身体になっているのだろう。

となれば当然、斬りつけた分だけの反発力を感じてしまうのだが。

精神力の強い賞金稼ぎの爪は、相手の身体の抵抗を受ける事もなく易々と切り裂いていった。

ダメージを受けた悪霊達は、風の鳴る音に似た悲鳴をあげて消えてゆく。

中には半身を無くしてなお存在するものもいたが、ルートの追撃によつて消滅していった。

ルートもまた、悪霊達に立ち向かっていた。

殆どはフリッツが相手をしていたが、時折襲い掛かる者に対しては唱えておいた退魔光^{バニッシュ}で撃墜する。

そして間に合わない時には、腰のバッグに入れておいた小さな銀製のスローイング・ダガーを投げつけた。

彼女のダーツの腕は見事なもので、眉間などの急所への確に当てていった。

本の前に立ちふさがる幽霊を斬ったのが最後だった。

フリッツは黒く輝く本を拾い上げ、開いているページを掴む。

人間か何かの生物の皮膚を模しているのか、妙に弾力のある気持ちの悪い材質のそれを勢いよく千切り取った。

紙はページの中程でゆっくりと破れていった。

破れる音が紙のそれではなく、男の呻き声という風な不気味なもので、低く、小さく響いていた。

まるで、本から切り離す者を呪うかの様に。

「この……！」

呻き声は紙が破れるほどに大きくなっていく。

フリッツが渾身の力でそれを二つにした途端、大きな衝撃を受けた。

ブアッ！

「フリッツ！！」

何かが爆発した様子はなかった。しかし“拒む”力としか言いようのない、確かな衝撃がフリッツを襲った。

彼は強大な力で投げ飛ばされたかの様に宙を舞い、背中を洞窟の壁に叩きつけた。

振動が洞窟中を伝い、ルートの足元まで響いてきた。

ルートは急いで彼のもとへ駆けつけた。

フリッツは壁にもたれたまま、ぐったりとして動かないでいる。

彼女はひどく焦った様子で彼の名を呼んだ。

「大丈夫！？ 聞こえるフリッツ！！」

フリッツの手を持ち上げても、だんとして力が入っていない。

気絶してるのか、それとも

まさかこんな反動が来るなんて思ってもいなかった。

自分の経験不足なのか、魔術書の製作者が狡猾極まるのかはわからない。

だが彼女は、油断が自分の中にあっただからこの結果を招いたのだと感じ、ひどく後悔した。

ルートはフリッツの身体をくまなく確かめる。

石壁に強かに叩きつけられたというのに、目立った外傷はなかった。それなのに意識のない様子が、逆に彼女の不安を煽った。

彼女は頂垂れるフリッツの顔を除く。苦しそうではなく、まるで眠

った様に穏やかな顔をしていた。

「フリッツ …!?」

突然。

ルートの心配をよそに、意識の無いはずの男の顔が笑うのが見えた。

「 …… なんてな」

悪戯っぽい笑みを浮かべ、フリッツは何事もなかった様に立ち上がった。

外傷が無いのも、単純にそれだけのダメージを受けていないからだ。

衝撃はあつたらしく、彼は拳で背中や腰をトントンと叩いて様子を伺っていた。

「ひどい！ …… すっごく心配したのに！」

「ははは。それくらいで十分だ。普通の奴なら死んでたぜ」

ルートは安堵するも、深刻になっていた自分が恥ずかしくなり、そんな状況を作り出したフリッツを呪った。

彼は笑って返事をする。しかしその中身は冗談ではなかった。

どうやったかは判らないが、実践に慣れているフリッツだからこそ、あの衝撃を軽減できたのだから。

彼女もそれは感じているらしく、それ以上反論はしなかった。

フリッツは力を失った魔術書へと近寄った。

呪いの声も止み、術式の書かれたページは完全に二つに破られていた。

本当に魔法は止まったのかと注意深く辺りを見回し、手に持った黒

い本も覗いてみるが反応は全くない。

ルートも周囲の気配を確かめた。専門家の彼女が察知できないとなれば、まず安全だろう。

彼女がフリッツを見て頷いた。

本と紙を地に投げ捨て、彼は額にうつすらと滲み出た汗を手で拭いた。

「……ふう、何とか終わったか」

「そうだね」

「お疲れさん。よく頑張った」

フリッツは苦笑いするルートの方へ歩いていき、頭を撫でながら感心した様に言った。

一体何度、戻って待ってると言おうと思ったか。

何度、やはり連れてくるんじゃないかなかったと後悔したか。

少女に対するその心配も後悔も全て杞憂で終わった事に、男は安堵していた。

「大活躍だったな。全く、大したお嬢さんだよ」

「ね？ 連れてきて良かったでしょ？」

ルートはそう言って笑うと、腰を上げた。

小走りで黒い本が落ちている所まで行くと、それを拾って眺めながらフリッツに問いかけた。

「どうしてこんな本を持ってたのかな？」

「さあな。どうせ盗んだモンだろう。元は魔法使いの持ち物だったんじゃないのか？」

魔術に疎いフリッツにとっては、そのくらいの事しか思いつかない。対するルートはどこか引つかかる事があるらしく、小首をかしげていた。

「……でも、ちょっと気になるなあ」

「何が？」

「作った人の事。こんな危なっかしいものを何で作ったのかな、って」

「ま、相当よからぬ事には利用できそうだな……」

魔法の心得を持たぬ者が自在に幽霊を呼び出し、使役できる書物。考えられる用途は、暗殺や何かの謀略などに使われる事しか思い浮かばない。

実際に、グラウンに囚われた部下をこの魔術書を用いて助け出したのだから、なおさらそのイメージは強い。

しかし、黒魔術の術式をアレンジできるほどの術者が、何故そんな物を作ったのだろうか？

ルートは本を開き、破られたページを見つめ　何かを考えている様だ　再び男に尋ねた。

「ねえフリッツ。これからエツフェンベルクに行くんでしょ？」

「ああ」

「あのね、町についたらちょっと行きたいところがあるんだけど」

「どこへ行くつもりだ？」

少女は本を閉じて脇に抱え、はつきりと言った。

「司祭様のおうち」

「……は？」

「この本を見せてみるんだ。司祭様って物知りだから何か知ってるかも」

ルートはフリッツと出会う前にエツフェンベルクに行っていた。

そこで街の司祭と知り合ったのだろうか。本人と面識があるかの如き口振りで「物知り」だと言った。仮にも大規模な図書館を持つ街の長だ。その知識量は期待してもいいだろう。

しかし一都市の最高権力者が、たった一人の少女相手に時間を割くだろうか。

その疑問とは別に、フリッツはルートの行動にあまり賛成は出来なかった。

この本が盗品なのは明らかだ。出所が判らないものを無闇に見せるべきではない。

そして、これほど物騒な物なのだから、追求するにつれて何かしらの危険が降りかかるに違いない。

深追いすればするほどに、可能性は高まっていくだろう。

自分から言い出したとはいえ、護衛役のフリッツにとって、それは厄介な事に他ならない。

「……俺はお前さんを家に送りたいんだが」

「うん、“安全に”でしょ？」

「ああ。だから余計な事に首を突っ込むな」

「突っ込むつもりはないけど、もし突っ込んでたら守ってね」

しゃあしゃあと言うルートに彼は絶句した。

好奇心の強いお嬢様には、普通に釘を刺すだけでは到底止められる

ものではないのだろうか。

厄介ごとなど何処吹く風という感じの笑顔を見せる少女に向かい、フリッツは今までで最も大きな溜息をついた。

「はあ。困ったお嬢さんだよ、全く」

「ま、いいじゃない。報酬うんと出して貰うからさあ」

「当然だ」

「じゃあ早くここから出ようよ。エツフェンベルクに出発ー！」

「そう急くな　グラウンに戻って礼金を貰うのが先だろ」

二人は、駆け足で行くルートを追いかける形で洞窟を後にした。

まずはグラウンの役所に行って事の顛末を報告し、アジトで果てた盗賊達の処理を頼みに行く。

勿論、30万バレンという大金を受け取るのも忘れない　。

東の空はつつすらと明るくなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3652b/>

除霊師の少女

2010年10月9日05時36分発行